

「忘れられたヒーロー」覚え書

春がやってきてプロ野球開幕の頃となると、有力新人の話題などで賑やかになる。その蔭で、かつてのヒーローがいつしか忘れられて行く。球界だけでなく、国際金融界でもそんなことを思いださせるのが、かつて期待の新星といわれたSDR（特別引出権）の運命である。

今や覚えている人も少なくなったが、SDRは1968年に正式に誕生が認められ、1970年に初めて34億ドル相当が創出された。それに先立つIMF総会で、宇佐美日銀総裁が創出合意文書に署名されたが、随行した私にとってSDRの誕生に立ち会ったという格別の思い出がある。SDRは、金のように自然の産物でもなければ、ドルのように一国の恣意で供給されるものでもなく、言わば「人間の英知」によって計画的に作られた準備資産であるということで高く評価された。そして、世界経済の拡大に合わせて適切に創出されるものだから、今後の国際金融を担う主役として期待された。

ニクソン・ショックによって金とドルのリンクが切れると、SDRを中心とした新しい国際通貨制度を作るために、1973年に20国委員会が設けられ、私もその一端に参加した。2年に亘る議論の結果、金を次第に廃貨する方向が合意され、改正されたIMF協定では、条文から金という文字を全て追放し、SDRが中心的な準備資産たることが明記された。

あれから30年たった今、SDRは主役どころか世界の総準備資産の僅か1パーセントにも充たず、いわばベンチの片隅で席を暖めているだけになっている。金を押しのけて国際通貨制度のスター・プレイヤーになる筈だったSDRが、その後、何故忘れられて行ったのだろうか。いろいろ理由はあるが、端的に言って、球団の監督ともいべき米国の心变りのためといってよい。金廃貨は米国自身の主張だったが、石油ショックの発生でドルという基軸通貨を持つ有利さを再認識した米国は、ドルのライバルになるSDRを疎み始めた。丁度、監督が自分のドル息子を最良して重用したようなものだ。

SDRをもっとスターにしようという努力がなかったわけではない。SDRを使い易くするための協定改正が行われたほか、SDRをもっと馴染み易い呼び名にしたらどうか

(例えば鈴木一郎でなくイチローというように)と当時の愛知大蔵大臣が提案され、支持もあった。しかし、何故か尻つぼみとなり、昔の名前で出続けることになってしまった。

忘れられて行く SDR の歴史の中で、私にとって忘れられないエピソードがある。ミス・サイゴンというミュージカルを観た方は、サイゴン陥落のハイライト・シーンを覚えておられるだろう。1975年4月30日、あの混乱をフィナーレとしてベトナム戦争は終わるのだが、これより3週間ほど前に、ワシントンの IMF 本部に一通のテレックスが入った。南ベトナム政府が、保有する SDR の引き出しを求めるものだった。既に南側の敗色濃く、政府の在外預金がどんどん引き出されて、何処にか消えているとの噂が流れていた頃だけに、IMF は困惑した。というのは、SDR は無条件で引き出し可能な資産で、協定上これを拒否できず、引き出された SDR を提示された加盟国は引き換えにドルや円を渡さなければならない。通常であれば事務的に処理されるケースだが、緊迫した情勢だけに、議論は紛糾した。無条件の権利だから自動的に処理すべきと主張する米国と、IMF の善管義務から拒否すべきとするその他諸国が対立したまま、一週間がたった。行き詰まりを打開する妙案を出したのはフランスだった。協定上は当然応ずべきだが、いま現地はかなり混乱している模様だから、念のため、このテレックスが真正なものかどうかを、現地政府に再確認してもらおう、というのだ。予想された通り、この照会には回答がないまま、間もなくサイゴンは陥落した。この SDR は、その後北ベトナム政府によって承継されることになる。

このエピソードは表に出ることも無く、SDR は次第に影が薄くなり、ヒーローになる夢は遠く消えた。それでも、SDR には IMF の計算単位という役割もあることから、ベンチの片隅でスコアラーの役は果たしていると言ってもいい。因みに、わが国の外貨準備総額4700億ドルのうち、SDR は僅か25億ドル程度にすぎないから、大方の人が関心を持たないのも無理は無い。「人間の英知」も結局、競争には勝てなかったということだ。

(農林中央金庫経営管理委員 若月三喜雄・わかつきみきお)